鉄血無敗の神装機竜

やーみん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「ねえオルガ、次はどうすればいい？」

「そんなの決まってんだろ、次は……」

戦いの果てに命を落としたオルガと三日月、しかし気が付くと見慣れない場所に……

新たな仲間たちと共に新生鉄華団を結成し再び突き進む。

王道と覇道が交差する、鉄血最強の学園ファンタジーバトル、開幕！

『機動戦士ガンダム　鉄血のオルフェンズ』と『最弱無敗の神装機竜（バハムート）』のクロスオーバー

です。

キャラクターの言動や行動に本編と矛盾を感じることがあるかもしれませんが、それでもご覧いただけたら幸いです。

原作小説の5巻を目標に頑張ります。

目次

プロローグ ―――――― 1
第1話　どうせ後戻りはできねぇんだ、やりゃあいいんだろ！ ―――― 16
第2話　朱（あか）の戦姫（せんき） 39
第3話　天声（スプレッシャー） 53
第4話　幻神獣（アビス） ―――― 69

プロローグ

『俺達には辿り着く場所なんていらねぇ』
『ただ進み続けるだけでいい。止まんねぇ限り、道は続く』
『俺は止まんねぇからよ、お前らが止まんねぇ限り、その先に俺はいるぞ！』
『だからよ…止まるんじゃねぇぞ――――――』
『――――――俺には、オルガがくれた意味がある』
『なんにも持ってなかった俺のこの手の中に、こんなにも多くのものが溢れてる』
『そうだ、俺達はもう辿り着いてた』
『俺達の…本当の居場所――――――だろ？オルガ』
『――――――ああ、そうだな…ミカ』

「つくしょい！」

朝日が昇り、鉄格子から光が差す石畳の牢屋の中、黒い肌の男は大きなくしゃみをした。

男は顔中痣だらけな上に四肢に枷、肩から下を鎖で巻きつけられた状態のため手で覆う事も出来ない。

「汚いよ、オルガ」

隣にいた黒髪の少年、三日月が無表情で苦言を呈す。その言葉に黒い肌の男、オルガは「悪い悪い」と軽く謝罪する。

「はぁぁぁ……これからどうしよ」

更に隣では銀髪の少年が頭を抱えてオルガのくしゃみに負けないような溜め息をつ

く。オルガとは違い、この少年達は拘束されていないものの、所持品等は全て没収されているため脱出する事もできない。
「なんて声出してやがる、ライド。運が逃げちまうぜ?」
「ルクスだよ!運なんて牢屋に入れられた時点で全部逃げてるし、っていうかなんでそんな余裕なの!?」
銀髪の少年ことルクスはボロボロになってもあっけらかんとしたオルガにツッコミを入れる。
もしやこういう事態に慣れているのでは?とも考えるが、今は置いておくことにする。
「そういや俺達、どうしてこんな所にいるんだっけ?」
オルガとルクスのやり取りを眺めながら三日月が呟く。
「あぁ?そりゃお前……」
その問いに答えるべく、オルガは思い返す。何故自分達は投獄されたのか、そもそもどういう関係なのかを……

オルガ・イツカと三日月・オーガスは一度死んでいる。
比喩などではなく、実際に命を落としたのだ。
オルガはギャラルホルンに追い詰められながらも、どうにか生きる希望を手にしたが突然現れた刺客に撃たれ、
三日月は仲間を守るため敵の大軍を蹴散らし、屠り、薙ぎ倒すが、降り注ぐダインスレイブと疲労や出血が限界を迎えこと切れた。
壮絶に、無残に散ったこの二人だが…次に目を覚ましたのは森の中だった。
ここはどこだと困惑している内に、薬草採りの帰りで偶然近くに来ていたルクスが現れ、事情を説明する。
しかし当のルクスは火星はおろか、地球も知らないとのこと。更に戸惑う二人だがルクスの提案で街へ赴く事に。
そしてオルガ達は知った、ここは自分達の知っている世界ではないと。
文明のレベルが明らかに違う。
煉瓦や石造りの建物、自動車の代わりに馬車が走り、街灯も電気ではなく火で照らされ、英語でも日本語でもない文字（なぜか住民の言葉は解る）、ギャラルホルンに至っては名前すら存在しない。

明らかに二人の知っている火星でも地球でもない、先のルクスの返事もこれで納得できた。

ここは異世界、オルガと三日月がそれに気づくのに長い時間は必要なかった。

だがそれはそれとして、ルクスによると自分達が今いる場所…アティスマータ新王国の識字率はそれなりに高く、オルガくらいの年齢の若者は文字が読めないと就職に困るとのこと。

今のオルガ達は残念ながら根無し草、正直に言って生活がままならない。

そこでルクスは二人が仕事につけるまで面倒を見ると提案。

知り合ったばかりの相手にそんな事まで、とオルガは躊躇うが、幼い頃に生きるためならば窃盗や殺人などの犯罪に手を染めていた事を思い出し、そういった劣悪な生活を抜け出すために三日月と奮闘してきたというのに、同じ事を繰り返すわけにはいかないのでルクスの提案に乗る事にした。

それから三ヶ月後……

「俺はこのまま追いかける！ミカは裏から回れ。ライドは付いて来い！」
「分かった」
「ライドって誰？」
オルガ達は全速力でポーチを咥えた猫を追いかけていた。こうなった理由は勿論ある。
三ヶ月の間にオルガと三日月は、ルクスが街の住人達から受けた仕事を手伝って過ごしていた。
ルクスはそこまでしなくても、と遠慮していたがタダで養ってもらうのは筋が通らないというオルガの熱意に押されて了承、畑仕事に掃除、料理や鍛冶と子守りなど人数が増えたおかげか仕事も捗り、三人はいつしか街では雑用三人組もとい『鉄華団』と呼び慕われることになった。
ちなみにこの『鉄華団』の名付け親は当然オルガである。
仕事が無い時はルクスが教鞭を執り、二人に文字や地理を教えていた。
見慣れない文字に最初こそ四苦八苦していたが元から頭の回転が速いオルガは徐々に覚えていき、三日月もかつてクーデリアに教わった時の要領を活かして瞬く間に知識を吸収し、半月でルクス自身が教えられる分を殆ど覚えた時には大変驚かれた。
しかしその生活に転機が訪れた。

ある日、顔馴染みの酒屋の娘と談笑していると近くにいた野良猫が彼女のポシェットを咥えて走り去ったのだ。

「あはは…無理しなくていいよ?」

酒屋の娘はそう言うが、知り合いの所持品が盗まれて放っておける『鉄華団』ではなく三人は必ず取り戻すと決意、追う事になった。

しかし野良猫の方もかなりのやり手で入り組んだ路地裏を走り回り、物を倒し転がすなどの足止めを何度も行い、オルガ達は苦戦を強いられる。

それでも三人は諦めず猫の妨害に耐えて追い続け、高い外壁を乗り越えてどこかの施設の敷地に入ってしまうがオルガ達は後で事情を説明すれば、と深く考えることはなかった。

三日月はオルガが先に命令したため敷地の中にはおらず、裏側へ向かっているだろう。二人は辺りを見渡して猫が建物の屋根へと登っていくのを発見、助走をつけ近くの塀を蹴って屋根に飛び乗り追いかける。もはややりすぎという自覚はあるがそこは男の意地、ここまで来たなら果たすしかない。

「ようし、あと少しだ。これで……!」

「も、もう限界……」

オルガとルクスはぜえぜえと息を切らしながら走るが、猫も体力が切れたらしく動き

が遅くなった。
もう少しで咥えられたポシェットの紐に手が届く、オルガは残った力を振り絞り紐を掴むため手を伸ばすが、
べきっ
という、不穏な音が聞こえた。
「あ？」
突然の事に二人の足は止まる。音の発生源はオルガの足元、嫌な予感を感じつつもオルガは視線を下に向ける。
「……離れろ、ルクス！」
オルガが今踏んでいる屋根の部位には亀裂が走り、それが段々と広がっていく。
オルガの言葉を聞きルクスは後ろに下がり、オルガもこのままでは危険と前方に退避しようとする。
が、遅かった。
ビシビシッと屋根の亀裂は思った以上に勢いを増し、砕け散る。
「うわあああぁぁぁぁぁっ!?」
「お、オルガーーー!?」
後退したルクスは巻き込まれずに済んだが、オルガは体重が消える感覚と共に落下し

てしまった。

バッシャアァァァン……

そして一秒後、着水する。どうやら下は水だったようだ。

「わぷっ、げほっ、はあ、はあ……あ？」

頭から落ちたが水のおかげで怪我をせずに済み、安堵するオルガだが直後に別の違和感に気付く。

（なんだこれ……湯か？）

自分の腰から下に浸かった水が温かい。

白い湯気の向こうには、高級感のある大理石の柱と壁が、ランプで淡く、オレンジ色に照らされているのが見える。

「ここはまさか……――ッ？！」

オルガが現状を把握しかけた矢先に、それが見えた。

自分が落ちてきた天井の破片。

その塊が落ち、すぐ近くにいた小柄な少女の上に――。

「危ねぇっ！」

オルガは反射的に飛んで少女を突き飛ばし、覆い被さった。

そのためこの場に大きな水飛沫が再び飛ぶ。
「ッ……!?」
湯気の向こうでびくっとした少女達をなるべく見ないように、そのままの姿勢でオルガは顔を下に向けた。
「……ふっ」
服を着たまま湯に浸かっているオルガの下で、少女は笑う。
鮮やかな金髪に、勝気な赤い瞳が印象的な少女。
か弱い体躯とは裏腹に、ある種の老成した笑みがその口元に浮かんでいる。
色白の滑らかな肌は入浴のせいで上気し、頬まで赤く染まっていた。
可愛い。
と、傍から見れば言えたのだろうが、目の前の少女から立ち上がる湯気と剣呑な気配に、オルガは言葉どころか身じろぎひとつできずに固まってしまう。
「……おい変態、死ぬ前に何か言うことはないか？」
引きつった愛らしい顔から、物騒な言葉が飛んでくる。
しかし、彼女が怒るのも無理はない。
何故なら――――見えてしまっていたからだ。
広い浴槽の中で、彼女が巻いていたタオルがはだけて、艶めかしい裸身が。

湯を弾いてふるふると震える、可愛らしい膨らみかけの胸。
浮き出た鎖骨ときゅっと引き締まった腰のくびれ。
そして、つるつるしたお腹の下までがくっきりと……。
「……」
次の一言で下手な事を話せば確実に殺されるだろう、この状況で混乱したオルガの脳は危機を回避するために高速回転する、もはや手遅れだろうが。
（――そうだ、大将も言ってたじゃねぇか、とにかく褒めろって！）
以前、オルガ達は酒場のウェイターとして働いていた時、そこの店主に女性を口説くテクニックを教わった事があった。
ルクスは「あはは……」と苦笑いしながら聞き流し、三日月は元より聞く気ゼロであったが、生前に浮いた話が全く無かったオルガだけは真剣に聞いていた。
（メモまで取ったんだ、負ける気がしねえ！コイツの場合、ええと……）
オルガは返答の為、少女を再び一瞥した後に立ち上がる。
彼女の魅力は先に説明した通り、ならば言うべき言葉はこれしかない。
「ほぉ……やはり抜群のプロポーションだ。だが問題は光に照らしてみた時の……ハハハッ！なんてこった、完全なる黄金比かよ!?ヤバい、達する達す――」
「この……痴れ者がァーーッ!!」

オルガのあんまりなコメントが終わるより先に少女の怒りがふんだんに籠った右ストレートが炸裂、オルガは頬に拳の痕を残して吹っ飛ばされた。
「キャアアアアアアアッ!?」
このやりとりが合図となったのか、浴場の全体から無数の黄色い悲鳴が上がる。
裸身の少女達がその場にあった物を、全力でオルガに投げつけてきた。
風呂桶や石鹸に椅子など、疲弊しきったうえに殴られたオルガに避ける気力などなく、それらが悉く命中する。
薄れゆく意識の中、オルガは思った。
(だからよ…迂闊な事は言うもんじゃねぇぞ…)
ちなみに酒場の娘によると、父のアドバイスは当てにならないので無視していい、との事。

「お、オルガ、大丈夫……うわっ!?」
「屋根の上に誰かいるわ、きっとコイツの仲間よ!」
ルクスはオルガの身を案じて下を覗き込み、浴場だった事に気づいて驚いた所を少女

達に気付かれる。
　この場に留まっては不味い、しかしオルガを見捨てる訳にはいかないと尻込みしている内に駆けつけた衛兵に捕まってしまう。

　一方、その頃……
「捕まえ……たっ！」
　追手が勝手にいなくなり、勝ち誇っていた猫は敷地の裏へと出て行くが、草むらから突然現れた三日月に捕まってしまう。
　自分達の目的はあくまでポシェット、人間相手ならともかく猫に落とし前などつけさせれる訳がなく、三日月はポシェットを取り上げると猫を解放した。
「……なんかさっきから、騒がしいな」
　そそくさと逃げて行く猫を尻目に、三日月は取り戻せて笑みを浮かべるのと同時に敷地の方へと見やる。
　外壁に身を乗り出して覗いてみると、一つの建物から大勢の人間が集まっているのが見える。

内容までは分からないがこちらからも声が聞こえるので只事ではないだろう。
「オルガ、また無茶やったんだな」
オルガとルクスが勝手に敷地内にへ入ったのは知っている、であればトラブルの原因になりかねないのは明白だ。
であれば、あの騒ぎもオルガ達が絡んでいるのだろうと、三日月は確信する。
「こんばんは、こんな所でどうしたの？」
それでもオルガ達を助けに行こうと壁をよじ登ろうとすると、不意に後ろから声をかけられた。
声の主は蒼い髪の細身な少女で、端正な顔つきと立ち姿から育ちの良さが伺える。
「アンタここの人？オルガ達が中にいるから迎えに行きたいんだけど」
三日月は登るのを止めて降り、少女に事情を話す。もしかしたら案内してくれるかもしれないと考えて。
「友達が中に？確かにそれは心配ね……ところで、貴方が手に持っているそれは何かしら？」
「これ？これは昼間……――っ」
少女に掴んでいたポシェットの事を指摘され、三日月は説明とそれを見せるべく掌を差し出すが、少女は突然三日月の腕を掴む。

一瞬の出来事の上、敵意を全く感じなかった三日月は不意を突かれるが、抵抗を試みる。

しかし、それより先に足を払われ視界が反転する、少女の背負い投げが決まって三日月の身体は地面に激突してしまう。

「いきなりごめんなさい。でもね、貴方も見逃す訳にはいかないの、覗き魔のお仲間さん」

「……は？」

その後、三日月は少女の攻撃が応えて身動きできず、彼女の呼んだ衛兵達に連行された。

こうして長い一日が終わり、始まる。

第1話　どうせ後戻りはできねぇんだ、やりゃあいいんだろ！

「……っつう事があって――――ッ!?」
事の発端を話し終えたオルガの首を三日月が片腕で締め上げる、それもかなり強い力で。
「やっぱりか。駄目だよ、オルガ」
そんな事をぬかせば完全に変態扱いだろうが、おかげで俺もその変態の仲間入りだぞ。
と、三日月の瞳は怒りと共にそう訴えている。
取り上げられた所持品には例のポシェットも含まれており、その中に下着が入っていたため三日月は下着泥棒の烙印を押されたのだ。
「す、すみませ、すみませんでした……」
あまりの迫力にオルガはブルブル震えるしかなかった。
そんな割とよく見る二人のコントを尻目に、ルクスは再び大きい溜め息をつく。
「昨日も今日も仕事があったのに、どうしよう……僕の事もバレただろうなぁ……」

ルクスの特徴的な銀色の髪、そして新王国の恩赦を受けた『咎人』を示す黒い首輪。
これだけ証拠が揃っていれば、既に素性が特定されてしまっただろう。
かつて、アティスマータ新王国はアーカディア帝国という名前だった。
世界最強と恐れられた軍力と永きにわたる圧政により、民や他国を苦しめたがクーデターによって崩壊、
生き残った皇族であるルクスが新王国の恩赦により釈放され――――、
その条件として『あらゆる国民の雑用を引き受ける』という契約を交わしたのが、つい五年前のことだ。
当然、ルクスはこの事をオルガ達にも話したことがあるが、
『だからなんだ、お前は俺達の恩人で大事な仲間じゃねぇか』
『そうだよ、ちょっと甘いけど芯が強い奴だって事も知ってるよ』
とのこと、それを聞いたルクスは暴君の子め、と昔のように謗られるのではと不安を抱いていたため、喜びのあまり泣いて感動していた。
「仕事は一度でもすっぽかすと借金がまた増えちゃうしなぁ……」
「お目覚めかな？諸君」
「わっ……!?」
ふいに声をかけられて、ルクスはどきっとする。

いつの間にか檻の向こうに一人の少女が立っていた。
一部を黒のリボンでくくった金髪と、剣先のように鋭い真紅の瞳。
白を基調とした制服に身を包み、どこか影のある笑みを見せている。
「ん？おい誰だ？ソイツは」
少女の存在に気づき、締め上げられたままの状態でオルガはルクスに問う。
やや身長が低めのルクスと三日月より、更に小柄な色白の少女。
にもかかわらず、少女の存在感は恐ろしく強かった。
不敵で、絶対的で、それと同時に誰も寄せつけない、強烈な自信をまとっている。
まるで酒をたっぷり含んで火を点けられたケーキのような、甘さと熱さを併せ持つ印象の少女だった。
少女はソイツ呼ばわりされて眉間に皺を寄せるが、すぐに戻して「ふっ」と笑う。
「随分な挨拶だが、昨晩は助けてくれてありがとう。ついでに素晴らしい口説き文句だったぞ？思わず惚れてしまいそうになるほどにな」
「はぁ？あんた何言って……あ」
オルガは少女の皮肉が解らず、頭にはてなを浮かべるが、数秒で思い出す。
昨晩、オルガが浴場に落ちた際、勢いで組み伏せてしまった件の少女を――。
少女の怒気を孕んだ気配に、オルガとルクスは冷や汗が背筋を伝うのを感じる。

「ふっ、まあお前らに聞きたいことは死ぬほどあるけどな。その前に学園長から話があるそうだ、ついて来い」
　どこか影のある笑みを三人に向けると、金髪の少女は牢の鍵を開ける。
「……あの、学園長って？」
　牢を出ながらルクスはおそるおそる問う。
「ほう、可愛い顔をして口も立つようだな。知らずに忍びこんだとでも言うつもりか？この学園の女子寮に」
「え……、ええぇぇぇえっ!?」
　少女の返答にルクスは驚きの声を上げる。
　ポケットから唯一取り上げられなかった手帳を慌てて取り出し、今日の日付を確認すると……
【仕事場】城塞都市『クロスフィード』・王立士官学園
【依頼主】学園長、レリィ・アイングラム
【仕事内容】新王国・第四機竜格納庫の機竜整備
「じゃ、じゃあ、まさかここって…僕たちが今日、働きに行く予定だった……」
「どしたの？ルクス」
　冷や汗をダラダラ流すルクスを見て、同じく牢から出た三日月が首を傾げる。

オルガは拘束されて身動きできないため、三日月がオルガを縛る鎖の垂れた部分を掴み引きずっている。
そのオルガもルクスと少女の会話を理解したためか、水たまりができるくらい冷や汗が止まらない。
「リーズシャルテ・アティスマータ」
「は……？」
ふと、目の前の少女から言葉と笑みが返ってくる。
「私の名だよ。新王国第一王女――――五年前に帝国を滅ぼした、新王国の姫だ。よろしくな、『色情魔』に『王子様』♪」
ぱちっ、とにこやかに少女は紅い瞳をウインクさせる。
その目は半分笑っていなかったが。
「「えぇぇぇぇぇぇぇぇっ!?」」
オルガ（色情魔）とルクス（王子様）の叫びが牢屋に反響した。
「……？」
が、三日月だけは首を傾げたままだった。

「ふぅ……。それじゃあ結局、今回のは不幸な事故ということでいいのよね？オルガ・イツカ君？」

学園長室に通されたオルガ達は、この騒ぎに至った経緯を話すのと同時に、予定していた仕事先であるこの学園そのものの説明を、

学園長のレリィから受けていた。

ちなみにオルガはここへ来る途中、リーズシャルテに鎖と枷を外してもらったため、自由に動けるようになった。

ここはアティスマータ新王国の管理する、機竜使い（ドラグナイト）士官候補生の学園。

機竜――装甲機竜（ドラグライド）とは、機攻殻剣（ソードデバイス）という剣型の装置を起動することで召喚され、伝説の竜を模した機械装甲を身に纏い、

一騎当千の戦力を得る古代兵器だ。

世界に七つ発見された遺跡（ルイン）。

そこから発掘されたその兵器は、過去数百年で培ってきた戦争概念を一瞬にして覆すほどの威力を持つ。

その機竜を身に纏い、使いこなせる人間は機竜使い（ドラグナイト）と呼ばれていた。

しかし、装甲機竜（ドラグライド）は希少かつ高価で、王国の騎士か一部の権力者しか基本的に持つこ

とはできない。

「装甲機竜（ドラグライド）に携わる人間を教育する学園、ですか……？」

「そういうことになるわ」

ルクスの問いに、レリィは笑顔で頷く。

学園長と言ってもまだ若い。

年の頃は二十代後半ほどで、教師と言っても差し支えない風貌の女性は、レリィ・アイングラムと名乗った。

彼女自身も国家と直接関わるほどの販路を持つ財閥の令嬢、つまり生粋の箱入りお嬢様の一人、というわけだ。

そして――――元皇族であるルクスの数少ない顔見知りでもあった。

「装甲機竜（ドラグライド）が遺跡（ルイン）より発見されて十余年、私達女性は旧帝国が敷いてきた男尊女卑の制度と風潮により、

その使用は殆ど禁じられてきたわ。でも――」

レリィが言葉を区切ったところでオルガの隣に立っていたリーズシャルテが口を開く。

「新王国が設立したのを境にその認識は一変。機体相性の適正は女の方が遥かに上というデータが報告され、これを機に専門の育成機関を

設立し、他国に負けない機竜使いの士官を揃えるべくその育成に力を注いでいる――というわけだな」

「ええ、その通りです」

リーズシャルテの補足にレリィが頷く。

装甲機竜の前には剣も銃も大砲も、それらの武器兵器が全て無へと還る。

登場以来、戦争はもちろん、外交や商工もその言葉なしでは何も語れないところまで来ている。

オルガと三日月が元いた世界では、モビルスーツが当てはまるだろう。

最も、モビルスーツは製造される物ばかりだが、発掘されたという前例はある。

機竜使いの育成機関があることくらい、ルクスも知っていたが――。

「で、でも、なんで僕達が呼ばれたんですか？」

ルクスが困惑した表情で依頼主のレリィに聞くと、

「あらあら、随分と謙遜するのね。決して場違いな仕事でもないでしょう？『無敗の最弱』さん」

年上らしい悪戯っぽい笑みが返ってきた。

『無敗の最弱』。

最弱と語るが、レリィのこの発言は決してルクスを貶すものではない。

王都でのコロシアムで月に一度行われている、装甲機竜（ドラグライド）を用いた『公式模擬戦（トーナメント）』。
戦績次第で賞金も出るその場で最多の出場回数を誇り、その戦闘スタイルからつけられたルクスの異名であるが――――。
「そ、そうじゃなくて、ここって女学院ですよね？男の僕達じゃ……」
「残念ながら、人手が足りないのよね」
ルクスが反論する前にレリィが口を開く。
「機竜使（ドラグナイト）いの歴史はまだ浅いでしょう？旧帝国の使い手も五年前のクーデターで大半が死んでしまったし、不本意だけど男の協力者を招くしかないのよ。整備士も機竜使いもね」
「僕は整備の方はほとんどできませんよ？オルガ達は……」
「ええ、俺もミカもです。装甲機竜（ドラグライド）に触ったのもつい最近ですし」
「予備知識があるだけでも貴重なのよ、これから覚えていけばいいわ。……オルガ君達は少し不安だけれど」
笑みを浮かべてレリィは即答するが、そのあとでやや汗を垂らす。
本来はルクスだけに頼む予定だったが、オルガと三日月と行動している事を最近になって知り、仕方なくこの二人も呼ぶことにしたのだ。
安酒場を溜まり場にする荒くれ者といった風貌ではあるが、ルクスが信頼しているよ

うなので意外と見かけによらないのでは、とレリィは考える。
「学園の敷地にある新王国第四機竜格納庫。今日から週に三回、あなた達にはそこに通ってもらうわ。汚れるし、重労働だし、怪我の危険もあるけれど、良家のお嬢様たちにそんな事はさせられないでしょう。あなた達も男冥利に尽きると思わない？」
　からかうような声で、レリィが微笑んだ。
「……」
（なぁ、このおばさんちょっと強引じゃねぇか？）
（あはは……そこがレリィさんらしいというか。一応、まだ二十代だからお姉さんって呼んであげて……）
　オルガとルクスは周囲に聞かれないよう小声で話す。
　が、会話のある件でレリィの眉が一瞬、ピクッと動くが、誰もその事に気付かない。
「機竜使いとしてのお仕事はまだ考えてるから、それもいずれ――ね」
　一つ深呼吸をしたレリィが話をまとめようとした時、
「学園長、少しいいか？」
　ふいにリーズシャルテが手を突き出し、話に割り込んできた。
「話はわかった。だが、私達はまだこいつらを――とくにこの男を認めたわけではないのだが？」

鋭い眼差しで三人に、特にオルガを強く睨みつけて言う。
その口端はかすかな笑みを作っていた。
「……」
住居不法侵入及び器物損壊、全裸の少女を押し倒すという端から見なくとも完全な婦女暴行。
しかもその少女が一国の王女とくれば、オルガの罪状は計り知れないだろう。
最悪、二度と日の出を見る事はないかもしれない。
沈黙するオルガだが、内心では不安と絶望と恐怖が入り混じる。
自分だけがそれを被るなら素直に受け入れよう、しかし、三日月とルクスにまで罰が下るのはどうだ。
彼らは自分についてきただけで、とばっちりを受けてしまった、言わば被害者だ。
「私の疑いは晴れていないぞ。この男どもは覗き魔、痴漢、下着ドロの変態で犯罪者だ。そんな奴らをこの学園で働かせるなどありえない！というか、まずは軍に突き出す方が先だ。司法の場で裁かれ、臭い飯を数年食ってから外の空気を――――」
「こいつらは、俺の命令であの場にいただけなんだ!!」
「――っ!?」
興奮し、まくし立てたリーズシャルテの話しを遮り、頭で床を叩き割るような勢いで

オルガは土下座する。
　突然の行動にリーズシャルテは驚き、思わず一歩下がってしまう。
「俺ならどうにでも殺してくれ、何度でも殺してくれ！首を刎ねて、そこらに晒してくれてもいい!!こいつらだけは……！」
「あ、いや、別にそこまでは……」
　二人も牢獄行きなど絶対に阻止しなくてはいけない痴漢（オルガ）の必死の懇願に、リーズシャルテも一瞬で冷め、困惑する。
覗き魔（ルクス）とレリィも困惑の表情を見せるが、下着（三日月）ドロだけは普段のポーカーフェイスで見つめている。
「……と、とにかく、リーズシャルテさんの気持ちはもっともよね。けれど、オルガ君達が本当に故意にやったのかまでは誰にもわからないわ。……逆も然り、だけれど」
　我に返ったレリィは柔らかく、凛とした態度をとり、年長者としてこの場を仕切る。
　その目は若干泳いでいるが。
「というわけで、本件の被害者であるリーズシャルテさん。ここは彼らの処分を貴女の裁量に任せてもよろしいかしら？」
（なんで任せちゃうんですか!?）
　という魂の叫びを、ルクスは必死に飲み込んで堪える。

新王国の恩赦で釈放されたルクスだが、同時に交わした契約で国家予算のおよそ五分の一に相当する額の借金を負わされている。

そんな『咎人』のルクスが更に咎を受けるのは大変都合が悪い。

「そうだな……オルガ・イツカ。と言ったか、お前に……いや、お前達にチャンスをくれてやる」

リーズシャルテが少し考えこみ、オルガを一瞥するとニヤリと笑う。

「お前達が機竜使いとして価値があるのか、ただの変態なのか、この私が直々に試す」

「は？そりゃどういう……」

そう告げて、オルガの問いに答えずリーズシャルテは帯剣の柄に触れ、同時にゆっくりと扉の前に歩いて行く。

「私に勝てば全員無罪放免、負ければ牢獄行き。勝負は装甲機竜を使った短時間一騎打ちの模擬戦、相手はオルガ・イツカを指名する。――それでいいな？野次馬達！」

リーズシャルテがそう言って、ドアノブをひねった瞬間、

「きゃあっ……!?」

ばたばたと、ドア越しに集まっていた女生徒たちがなだれ込んで山を作った。

どうやらオルガ達の処遇が気になり、聞き耳を立てていたようだ。

「学園の皆に伝えろ、人数は多い方が良い。私の勇姿をまた見せてやる」

「ま、待ってください！オルガは装甲機竜（ドラグライド）を使いこなせるようになってまだ――」
きゃあああああっ。
ルクスの抗議も空しく、それを聞いた女生徒たちは楽しそうな声を上げて去っていく。
「大変な事になったわよ！リーズシャルテ様が今回の痴漢と装甲機竜（ドラグライド）で決闘を――」
「相手は三人の内の肌の黒い男だって、あの怖そうな」
「貴族の方には無い野性味があって、正直好みなのですけれど……惜しいですわ」
部屋から出ていくリーズシャルテと共にそんな声が聞こえてきて、オルガは絶句する。
あの勢いだと決闘の前に、学園中に話が伝わっているだろう。
「教育体制を見直す必要があるかしら？一応、真面目な学校なのよねぇ、ここ」
「……学園長、まさかこうなると分かってあいつに決めさせたんじゃ……」
「あら、何のことかしら？おばさん、ちょっとよく分からないわ♪」
「……」
口は災いの元である。

「オルガさん、とんでもない事してくれましたね」
「返す言葉もございません……」
学園の来客用応接室。
高級感のある家具や調度品が並ぶこの部屋に、オルガとルクスはレリィの言伝でそこへ向かい、待っていた二人の少女と話しをしていた。
一人は先ほどから無言を貫くおとなしそうな黒髪の少女、もう一人はルクスと同じ銀髪を持ち、同じ首輪をつけた少女だった。
高級なアンティークドールのように端正な顔つきをしているが、それが台無しになるくらい眉間に皺を寄せて、正座をさせられたオルガを見下ろしている。
その威圧感にルクスもたじろぎ、何も言えなくなってしまう。
三日月は途中まで共に廊下を歩いていたが、「行きたい所ができた」と言い出し、この場にいない。
「――ま、まぁまぁアイリ、オルガもこうやってきちんと反省してるんだし、もう許してあげて？」
「……はあ、兄さんはホントお人よしと言うか、甘いと言うか」
おそるおそる口を開いてアイリをなだめるルクスに、アイリはため息をついて表情を

戻した。

少女の名はアイリ・アーカディア。

ルクスの実妹であり、旧帝国の生き残った皇族の一人、つまり元王女でもある。

互いに違う場所で過ごす兄妹は週に一度、近況の報告として手紙を出し合うため、アイリはオルガ達の事を知っている。

実際に会うのは初めてだが、決して穏やかなものではない事は言うまでもない。

「そういえば、彼女の事を話してませんでしたね。紹介します、名前は――お願いできますか？」

「Ｙｅｓ．一年のノクト・リークレット……と、申します。アイリの同居人兼クラスメイトです」

アイリが隣の少女に視線を移し、少女は自己紹介する。

「僕の名前はルクス・アーカディア、妹がお世話になってます」

「俺は、鉄華団団長……オルガ・イツカだぞ…！」

「なんで苦しそうに言うんですか？」

ルクスの後にオルガも自己紹介するが、ぜえぜえと息切れ気味に言ったためアイリにツッコまれる。

しかしそれはそれとして、アイリはコホン、と咳払いして話を戻す。

「今のオルガさんはリーズシャルテ様に勝ちさえすればいい。とお考えなのでしょうが、はっきり言って甘すぎます」
「Ｙｅｓ．アイリの言う事はごもっとも。ですが、つけ忘れていますよ？大好きなお兄さんを厄介事に巻き込んだ相手に、文句の一つでも言いたいのですよね」
「の、ノクト！余計な事は言わないでください！」
「けどよ、要は勝てばいいんだろ？」
　途中でノクトの茶々が入ったものの、リーズシャルテを相手に簡単には勝てないぞ。と告げるアイリにオルガは反論するが、アイリは声のトーンを少し落として続ける。
「私達学園の生徒はトーナメントへの参加が認められません。ですが代わりに校内戦というのがあるんですけど、リーズシャルテ様は現在無敗です。更に、神装機竜を使い始めてからは圧倒的な連勝を続けています」
「しんそーきりゅー？そいつは確か……」
　神装機竜。
　この世界でそれぞれ一種しか存在を確認されていない希少な装甲機竜（ドラグライド）で、その性能は並みの装甲機竜（ドラグライド）を遥かに凌ぐ。
　しかしその分機竜使い（ドラグナイト）に求められる操作技術、消耗する精神力と体力も桁違いであるため、新王国の法律で所持が厳しく制限され、相応の実力を持つものしか使用を許され

ない。

ＭＳ（モビルスーツ）に例えるなら、ガンダム・フレームが該当するだろう。

オルガも神装機竜の事をルクスから教わっていたが、滅多に見られる機会もないだろうと、記憶の片隅に追いやっていたが、今思い出す。

「……マジかよ」

片や一週間前に乗りこなせるようになった機竜使い（ドラグナイト）。片や神装機竜を駆り、勝利を絶えずに重ねる機竜使い（ドラグナイト）。

その差は歴然、この現実を突きつけられたオルガはつい頭を抑えてしまう。

「それでも、オルガさんには何としてでも勝って頂かなくてはなりません。負けたら兄さんまで牢屋に入ってしまいますし」

新王国との契約で、もしルクスが不祥事を起こせばアイリも処分を受ける事になっている。

そのためルクスは亡命する事も出来ないが、そのような事をする気も無く、むしろアイリが無事に暮らせるなら構わないと考えている程だ。

故にオルガは考える。自分の不始末でルクスと三日月が巻き込まれると、アイリはどうなるか。

最悪の展開を避けるには勝たねばならないが、そのハードルがあまりに高すぎる。

「お、オルガ？僕さ、リーズシャルテ様の所に行ってお願いしてくるよ、僕も参加させてほしいって。流石にオルガだけじゃ――――」

事の重大さ、負うべき責任の重さに意気消沈するオルガを見かねてルクスが声をかける。

が、言い終わる前に応接室の扉がぎい、と不意に開く。

部屋にいた全員が扉の方へ顔を向けると、別行動をしていた三日月が立っていた。

「三日月？一体どこに行って……それは？」

「オルガの機攻殻剣（ソードデバイス）、格納庫にあるって聞いたから返してもらった」

ルクスは行き場所も話さなかった三日月に問うが、彼が握っている革製の鞘に収められた短剣に気づく。

これはオルガが森で目を覚ました時、傍にあったもので、当初のオルガはどういう物なのか分からなかったが、ルクスが調べたら機攻殻剣（ソードデバイス）だと判明した。

簡単に手に入らない機攻殻剣（ソードデバイス）をどうして、とルクスは疑問に感じたため、オルガ達の面倒を見ると同時に監視していたが、共に過ごしていく内に二人に危険性はないと判断して今に至る。

三日月はこれを回収するためにこの場にいなかったのだ。

「ねえオルガ、次はどうすればいい？」

生前、幾度も三日月がオルガに放った台詞を、機攻殻剣（ソードデバイス）を突きつけながらこの世界でも再び放つ。

本来はオルガの指示を仰ぐものなのだが、今回は意味合いが違う。

どうすればいいか分かっているな？という行動を再確認させるための台詞に置き換わっている。

「勘弁してくれよミカ、俺は……」

「ダメだよ、オルガ」

オルガは顔を俯き弱音を吐くが、三日月はそれを聞きたくないと遮る。

「俺はまだ止まれない」

「待ってろよ……」

「教えてくれオルガ」

三日月は淡々と告げ、ゆっくりとオルガに歩み寄る。

表情は変わっていないがその存在感は一層に増し、オルガの前にいたアイリは思わず横へと道を開ける。

「待てって言ってるだろうが――――ッ!?」

「ッ!?」

何度も問う三日月にオルガは怒鳴り散らそうとするが、それすら叶わず、目の前まで

来た三日月に襟を掴まれ締め上げられてしまう。
突然の事にアイリとノクトは固まってしまうが、ルクスだけはなぜか落ち着いていた。
「ここが俺たちの場所なの？」
「……」
「そこに着くまで俺は止まらない、止まれない。決めたんだ、あの日に……決まったんだ」
「……！」
夕日が差す路地裏、動かない男、流れる血、巻き散る紙幣、硝煙の匂い。
オルガは思い出す。
生前にて、幼かったオルガと三日月が踏み出したあのスタート地点を――。
「ねえ、何をすればいい？何をすればそこへ着ける？教えてくれオルガ――オルガ・イツカ」
「――――」
「連れて行ってくれるんだろ？俺は次、どうすればい――」
「――離しやがれ!!」
オルガは逆に三日月の襟を掴み返し、壁へと突き飛ばす。

三日月は態勢を整えることなく激突し、大きな衝撃音を響かせた。
「ちょ、ちょっとお二人とも！喧嘩はやめてください！」
「い、Ｙｅｓ．そんなことをした所で状況は何も――」
「あー、大丈夫だよ二人とも」
アイリとノクトは慌てて止めようとするが、ルクスは穏やかな口調でそれを制止する。
「兄さん!?何を言ってるんですか！」
「僕も最初は驚いたけどさ、ほら」
非常識な事を、と睨むアイリにルクスはオルガを指差す。
アイリはその方向に視線を向けると、
「ああわかったよ！やるよ！どうせ後戻りはできねぇんだ、やりゃあいいんだろ!!」
このままでは殴り合いが起きるのでは、と考えていたアイリとノクトの不安は外れ、オルガは先ほどまでの弱気な姿勢が消え去った。
二人のこのやりとりはルクスも幾度か目の当たりにし、今ではオルガを奮い立たせる方法と認識している。
「負けてどんな地獄が待っていようとも、勝って、お前らを――俺が連れてってやるよ!!!」

「あぁそうだよ、連れてってくれ。次は何をすればいい？何を壊せばいい？オルガが目指す場所へ行けるんだったら、何だってやってやるよ……！」
「へっ……！」
二人は見つめ合い、ニヤリと笑う、もう互いの顔しか見えていないだろう。
そしてオルガは意を決し、三日月が差し出した機攻殻剣（ソードデバイス）を受け取る。
これからやるべき事はただ一つ、もうオルガの目に迷いなど無い。

「……あの、なんですか？これ」
「Ｎｏ．私に聞かれても困ります」
「あはは……オルガと三日月のスキンシップ。みたいなものかな？」

第２話　朱（あか）の戦姫（せんき）

「それでは新王国第一王女リーズシャルテ・アティスマータ対、オルガ・イツカの機竜対抗試合をこれより執り行う！」

審判役の教官の声と同時に、舞台が歓声と熱気に包まれる。

学園敷地内にある、装甲機竜（ドラグライド）の演習場。

周囲を円状に石壁で囲い、中には土を敷いた広いリングがある。

その中央でリーズシャルテとオルガは対峙していた。

中心のリングは低く、外に行くほど高く盛り上がった形状は、旧時代のコロシアムを彷彿とさせる。

観戦席には強靭な格子が張られ、更に生徒の機竜使い（ドラグナイト）数名が常に障壁を展開して守っており、巻き添えの心配はない。

オルガが周囲を見渡すと、相当な数の女生徒たち、そして教官までもがこの私闘とも言うべき決闘を見物しに来ているようだった。

「授業しろよ……今そういう時間だろ」

と、溜め息をつき、ごもっともな事を呟くオルガだが、少しだけ過去を思い返す。

鉄華団を設立する直前、たった一機で本部に押しかけて来たグレイズ。
地球に降りてから、雪原の上を列車で進んでいた時に立ち塞がったグレイズリッター。
生前のみならず、リーズシャルテという少女に挑まれて、自分はどこまで決闘に縁があるのだろうとオルガは再び溜め息をつく。
「知りたいか?オルガ・イツカ。私が何故お前に戦いを挑んだのか」
オルガの目の前でリーズシャルテが不敵に笑う。
まだお互いに装甲機竜(ドラグライド)は纏っていない。
リーズシャルテは装甲機竜(ドラグライド)を纏うのに適した、『装衣』という身体にフィットする服を身につけ、リングの上を佇んでいた。
装衣の構造上、身体のラインが浮き出るため、オルガにとっては目に毒なのでやや視線を逸らしている。
逆にオルガは装衣を着ておらず、代わりにタンクトップにズボンと軽装だ。
「えっと……昨日の事がそれくらい頭に来たから……か?」
「それは私に勝ったら教えてやる」
オルガも気になっていた。
本当に、ただそれだけなのか。

確かにリーズシャルテは好戦的な少女には違いない。
狼藉を働いた相手を公の場で自ら処罰する趣味を持っているのなら、大変いい性格の持ち主だろう。
だが、あの時風呂場に落ちて彼女を組み敷いた直後、オルガに向けていた視線は――ただの羞恥だけじゃなかった。
「立ち話もここまでだ、始めるぞ」
いい加減に準備をしなければ審判に注意されると考えたリーズシャルテは、笑みこそ崩さないものの目を細め、機攻殻剣（ソードデバイス）の柄を握り、美しい装飾が施された鞘から引き抜く。
「――目覚めろ、開闘（かいびゃく）の祖。一個にて軍をなす神々の王竜よ。《ティアマト》」
柄にあるボタンを押し、声を上げる。
機竜を目の前に転送するための詠唱符（パスコード）。
契約者の声を認識した刀身の銀線が、青白い光を帯びた。
リーズシャルテの前に光の粒子が集まり、朱き機竜が姿を現す。
「接続開始（コネクト・オン）」
更に呟くと、瞬時にその装甲が開かれ、リーズシャルテの身体を覆う。
頭、両腕、肩、腰、両脚、そして翼、武装。
機竜と同じく遺跡（ルイン）から発掘された装衣は、機竜の動力である幻想機核（フォースコア）からのエネル

ギーを効率的に伝導させ、通常の障壁とは別にその表面にも強力な障壁を発生させ、装着部位を守っている。

竜を模した機械の装甲は、リーズシャルテと一体化するように装着され、本人の体型より二回りほど大きな機竜使い（ドラグナイト）となった。

「……！」

「新王国の王族専用機、神装機竜――《ティアマト》。この機竜はそこいらの物とはわけが違うぞ？」

神竜の名に相応しいその巨大な威圧感にオルガは息を呑む。

本当にあれに勝つ気でいるのか？

と、一瞬だけ考えてしまうがすぐにその弱気を振り払う。

三日月とルクスの処遇も掛かっている以上、負ける訳にはいかない。

「オルガ選手、接続の準備を！」

審判に促され、オルガも機攻殻剣（ソードデバイス）を抜く。

元から鞘が無かったため、森の獣を獲って作った革の鞘から取り出したそれは特徴的な外見をしている。

鋭く尖ったオルガ自身の前髪に酷似しており、それを一回り大きくして柄を付けたような形状だ。

リーズシャルテ同様、柄のボタンを押し、オルガは口を開く。
ルクスに頼みこんで装甲機竜（ソードデバイス）の練習をしていた当初、手探り感覚で試し、偶然発見した詠唱符（パスコード）。
生前、ＭＳ乗りの仲間たちが口にした、出撃の際の発進シークエンスを――。
「オルガ・イツカ、《獅電》――――行くぞ」
オルガの声に応え、機攻殻剣（ソードデバイス）の刀身が光りを帯びる。
その光から現れたのは――白い甲冑だった。
左肩に小盾（シールド）、背中に備えられた背嚢（バックパック）には赤い花のエンブレム。
装甲機竜（ドラグライド）とかけ離れた外見のそれだが、構わずにオルガの全身を包む。
頭からつま先まで、白い装甲が取り付けられ、機攻殻剣（ソードデバイス）は手元を離れて浮いた後に柄が消え、角ばった形に変形する。
それがオルガの頭――兜に装着され、辺りから光が消えたので接続完了だ。
装甲機竜（ドラグライド）は通常、剥き出しの操縦席で機械の四肢を操るという形状だが、オルガのこれは本当の意味で全身に纏う、まさに鎧をそのまま一回りほど大きくした形状をしている。
「それがお前の装甲機竜か？珍しい外見だが……」
地上から３ｍ程浮き、オルガを見下ろしていたリーズシャルテが少しだけ驚く。

観客席からも、同様の反応が聞こえてくる。
「ああ、こいつが俺のＭＳ（モビルスーツ）……じゃなかった。装甲機竜の《紫電》だ！」
前世にて、オルガはテイワズから自分専用のＭＳを貰った事がある。
それがこの《獅電》だ。
量産機の外見を少し変えた程度のＭＳ（モビルスーツ）だが、それでも専用機なので当時のオルガは時間に余裕がある時、シミュレーターで操作技術を磨き、初陣でも活躍できるよう意気込んでいた。
しかし鉄華団の団長という立場上、自ら出撃する機会が全く訪れず、実質お飾り扱いで、結局最期まで乗る事は叶わなかった。
オルガの死後、代わりに副団長のユージンが操縦していたのだが、それはまた別の話である。
今自分が生きているこの世界で、遂に乗れたこの《紫電》にオルガは内心胸踊り、《ティアマト》の威圧感を物ともしない。
「……いや、待て。確か前に遺跡（ルイン）から発掘された物に……まあいい、見かけ倒しではない事を期待しているよ。――そろそろだ」
話しを途中で終わらせたリーズシャルテは真剣な表情に切り替え、眼前のオルガに鋭い視線を送る。

互いに準備が完了した以上、試合は今にでも始まるだろう。
賑やかに騒いでいた観客も静まり返る。
ぴりぴりとした緊張の空気、それを破るように甲高いベルの音がリングに響いた。
「模擬戦、開始！」
審判の声と同時に、二機の機竜が動き出す。
先に飛翔したのは《ティアマト》を纏ったリーズシャルテだ。
遺跡（ルイン）より伝わる、女神の名を冠する朱の機竜は、上空へ飛び上がると同時に右腕に持っていた機竜息砲（キャノン）――機竜専用の武装である大砲を構える。
《ティアマト》と違い、永続的な飛翔能力を持たない《獅電》を駆るオルガは手に持つライフルをリーズシャルテに向け、照準を合わせていたが、その構えを見て動きを止めた。
「アイツ、いきなり撃つ気か……！」
機竜息砲（キャノン）。
いわゆる、竜の吐く、強烈な炎を想起させる主砲。
動力たる幻創機核（フォースコア）からエネルギーを充填して放つ、高熱と衝撃を込めた一撃は、家屋一軒をゆうに吹き飛ばせる威力を持つ。
だが、発射までに『溜め』を要する分、回避行動までに十分な距離を開けられるか、防御の態勢を取られてしまう事が弱点だ。

現に今のオルガも、十分に回避可能な間合いを取っている。
故に、一対一での開始早々、狙っていくものではないはずだが――。
「ふっ……！」
そんなオルガの思惑を読んだように、リーズシャルテが笑う。
そして、オルガに合わせていた照準を、すっと、少し横に逸らし、
「……？」

ドウンッ！

発射した。
うねりを帯びた高熱の光芒（こうぼう）が、上空から地上のリングへ、直線に放たれる。
だが、当然オルガを狙ったものではないため、動かなければ当たることはない。
威嚇か、肩慣らしのつもりなのか？
しかしどうであろうと隙ができた、今の内に相手を撃ち落とそうとライフルを向け直すが、その刹那――。
「はっ」
遥か上空にいるリーズシャルテが、オルガを見下ろして、口元に弧を浮かべた。

右手には、たった今発射したキャノン。
そして、左手は――、機攻殻剣（ソードデバイス）の柄に添えられていた。
機攻殻剣（ソードデバイス）は、機竜とその武装を操作するための操縦桿のひとつ、つまり――。
「――っ!?」
ふいに、大型の鎚（ハンマー）を振り抜かれたような衝撃が、オルガの横腹に走った。
《獅電》ごと側方に弾かれ、突き飛ばされる。
すなわち、リーズシャルテがあえて照準を逸らして撃った、本来の砲撃。
その軌道上へと、オルガは押し出されたのだ。
「なっ、しまっ――!」
完全に虚を突かれた、回避不能のタイミング。
たとえ装甲が厚めにチューニングされた装甲機竜（ドラグライド）でも、最大充填された主砲を防御態勢も取らずに受ければ一撃で終わる。
オルガは砲撃を防ぐため、肩の小盾（シールド）を構えようをするが、それは間に合わない。
《紫電》の頭部、辺りを見渡す為のバイザーの中の顔が光に包まれる。
《ティアマト》が放った砲撃は外れる事なく《獅電》に命中、大きな爆発と煙を引き起こした。
「……ふん、やはり見かけ倒しだったか。少しは楽しめると思――」

立ち上る煙を眺め、呆気ない決着にリーズシャルテが溜め息をつく。
が、不満は最後まで漏らせずに、大きな衝撃が《ティアマト》に走る。
煙の中から一筋の閃光が放たれ、それが命中したのだ。
リーズシャルテ自身は装甲機竜（ドラグライド）の障壁によって守られるが、何度も受け続ければ障壁は消滅、試合においては敗北となる。
続け様に二筋の閃光も煙から発射され、一つは命中、もう一つは機体を横に逸らして回避した。
これは一体どういう事かとリーズシャルテは煙の方に顔を向けるが、すぐに違う物に目が行く。
背嚢（バックパック）から火を吹かして飛翔し、同じく背嚢（バックパック）から取り出した棍棒（バルチザン）を振り上げる《獅電》がこちらに迫っていたのだ。
右手にはライフルが握られたままであり、先程の三筋の閃光はそれの射撃だと瞬時に把握する。
リーズシャルテは咄嗟に《ティアマト》を操作し、機竜息砲（キャノン）を《オルガ》に向けるが、エネルギーの充填もしていないので撃てる筈もなく、
「オラァッ！」
オルガの掛け声と同時に振り落とされた棍棒は右腕を直撃、その拍子に機竜息砲（キャノン）は手

元から離れ、そのまま地上に落下してしまった。
「ッ!?」
予想外の展開にリーズシャルテは動揺を隠せないが、されるがままという訳にはいかない。
すぐさま《ティアマト》を後退させ、距離を取る。
《獅電》も棍棒（バルチザン）を構え直して追撃を試みるが、両者の間に複数の何かが高速で飛び、《獅電》の動きを止めた。
これ以上は踏み込めないと判断したオルガはライフルを向けつつ、《ティアマト》から離れる。
「今の言葉は撤回するよ、オルガ・イツカ。なかなかやるじゃないか」
一粒の汗が顔から流れるが、ひとまずの危機を回避したリーズシャルテは不敵な笑みを見せる。
彼女の周りには四つの物体が集まり、主人を守るように浮かぶ。
「アイリ達から聞いたぜ、そいつがあんたの特殊武装ってやつなんだろ?」
「その通り。これが《ティアマト》の特殊武装、《空挺要塞（レギオン）》だ」
神装機竜のみが使える、専用の兵器。
《ティアマト》が持つ特殊武装についてはオルガも把握している。

それは《ティアマト》が制御する、小型の流線型金属で、それ自体が推進力を持つ遠隔小型兵器だ。
平常時は四つほど機体に装備され、発射したユニットを自在に動かし、直接ぶつけて敵を破壊する。
その厄介な性質故に、オルガも当然警戒していた。
しかし、開幕と同時にリーズシャルテは飛翔しつつ、《空挺要塞(レギオン)》をオルガから隠して側方へ発射。
更に機竜息砲(キャノン)をオルガに向けたのだ。
いきなり主砲を向けられれば、誰だって注意がそこに向かう。
次に側方に照準を外して発射し、オルガにとっての右側を意識させたところに、視界に入らないよう迂回させた《空挺要塞(レギオン)》を左側からぶつけ、最大出力の主砲の、本来の軌道上のへと押し込んで攻撃する。
一撃必殺の計略。
オルガも唸る、一切の容赦もない悪魔じみた戦術。
何より恐ろしかったのは、その一連の動作に、まるで淀みがなかったことだ。
装甲機竜(ドラグライド)を駆る、正式な対人戦は今回が初めてなオルガだが、目の前の相手はまさしくエースパイロットに匹敵すると確信できる。

オルガの見た限り、王都の模擬戦でルクスが戦った機竜使い達（ドラグナイト）でも、ここまでの手合いはいなかった。

故に思う、本当に新王国のお姫様なのか？この女は――と。

「ちょっとだけ驚いたよ。だからな、その褒美にもう少し、《ティアマト》の力を見せてやろう」

絶対の自信と、威圧の笑み。

優雅な声を上げ、リーズシャルテが機攻殻剣（ソードデバイス）を構える。

「踊りは得意か？私のダンスは少々荒っぽいが……楽しませてくれよ」

その周囲には、機攻殻剣（ソードデバイス）により先ほどまで四つだった《空挺要塞（レギオン）》が追加転送され、四倍の数――計十六機に増え、宙を舞っていた。

武装の数に比例して、負担や操作難度も倍増するが、それでも強力な事に変わりない。

対するオルガの《獅電》の武装はライフル（ドラグライフル）と棍棒（バルチザン）、元はその二つだけだったがあまりに少ないため、ルクスの装甲機竜から幾つかの武装を借り受けたが、流石に《ティアマト》に並ぶ事は難しい。

しかしオルガは諦めない、彼の眼は勝機を掴むべくリーズシャルテを見据えている。

「上等だ。踊りなんざ一度もした事ねぇが、満足させてやるぜ」

「――フ、そう来なくてはな」

オルガの啖呵が気に入ったのか、リーズシャルテはニヤリと口元に弧を作る。
瞬間、辺りを浮遊していた投擲兵器――、一六機の《空挺要塞（レギオン）》が、一斉に攻撃を開始した。
それと同時に、《獅電》のライフルの銃口から火と発砲音が連続して放たれる。

第３話　天声（スプレッシャー）

「すごい……オルガさんは本当に試合の経験が無かったのですか？」
「Ｙｅｓ．あの動きであれば、新王国の機竜使いにも引けを取らないかと」
決闘の数十分前、対リーズシャルテ作戦会議を開き、アイリとノクトは学園の資料からそのリーズシャルテと《ティアマト》の情報を提供していたのだ。
しかし、それでも試合は今回が初めてだというオルガに不安しか抱けなかったが、次々に迫る《空挺要塞（レギオン）》を躱し、ライフルで《ティアマト》を牽制する《獅電》の善戦ぶりを眺め、観戦席に座る二人は驚く。
周りの席の女生徒たちから、同様の声が上がるのを聞き、それが気のせいではないとも確信する。
「言ったろ？オルガならやってくれるって。ルクスが教えてくれたのもあるけど」
「いやぁ、僕は基礎的な事くらいしか、本格的なのはまだだよ。けど心配なさそうでよかった」
三日月とルクスもオルガの奮闘に満足し、特に三日月は顔に出さないものの相棒の活躍に喜ぶ様子が伺える。

《獅電》に乗り始めてのオルガはＭＳと勝手が違うため、上手く動かせずに転倒を繰り返していたが、ルクスの指導もあって徐々に乗りこなしていき、安定して操作できるようになったのが丁度、一週間前だ。

四人は共に試合を眺めているが、もう二人ほど、同席している人物がいる。

「彼の実力は認めるが、さっきの機竜息砲（キャノン）はどうやって防いだんだ？」

「あ、それ私も気になってた。肩の盾じゃ小さすぎて無理だと思うけど……」

凛々しい顔の青髪の少女……シャリスと、活発な印象を受ける少女……ティルファーが先程、《獅電》が行った反撃について疑問を浮かべる。

この二人とノクトは学年こそひとつずつ違うが幼馴染の関係で、父親が新王国軍の副指令官を務めている三年生のシャリスがリーダー格として、遊びも勉強も楽しんでやってきた。

学園の自警係にも名乗りを上げるこの三人は、学園で三和音と呼ばれるちょっとした有名人だ。

「そりゃあ勿論、ナノラミネートアーマーのおかげだよ。」

「「ナノ、ラミネート……？」」

話しを戻し、シャリス達の問いに三日月が応えるが、聞いた事のない用語に二人は首を傾げる。

ナノラミネートアーマー。
オルガと三日月がかつていた世界、ＭＳや艦船の動力であるエイハブ・リアクターから生成される粒子によって引き起こされる磁気嵐に反応する、装甲に塗られた金属塗料の事だ。
表面が鏡面状に変質し、それが何層にも重なるため、射撃や砲撃による損傷を大幅に減らしてくれる。
その効果は強力で、農業プラントを吹き飛ばす威力を持つ、ビーム砲による攻撃でも物ともしない。
「あー、えーと……《獅電》の装甲はちょっと特殊で、射撃武器は効かないんだ」
「なんだって、そんな装甲機竜があるなんて聞いた事ないぞ!?」
「近寄られない限り無敵って事じゃん！もしかして《獅電》も神装機竜？」
三日月の端的な説明を受け、圧倒的な防御力を持つ《獅電》に驚くシャリスとティルファー。
ティルファーは神装機竜なのではと考えるが、
「Ｎｏ．性能自体は汎用機竜とさほど変わらないように見えます。オルガさんの操縦技術は見事なものですが」
「あ、そっか」

ノクトの分析ですぐに取りやめる。
汎用機竜とは、神装機竜とは異なり、同じ機体が多数確認されている装甲機竜（ドラグライド）だ。
基本的に飛翔型の《ワイバーン》、陸戦型の《ワイアーム》、迷彩や索敵能力に優れる特装型の《ドレイク》と、この三機がそう呼ばれている。
学園の女生徒達も、機竜使いの士官（ドラグナイト）を目指していることもあり、自前の機攻殻剣（ソード・デバイス）を所持している者が多い。
三和音も例外ではなく、今も自分達の腰に機攻殻剣（ソード・デバイス）を下げている。
「ところで、君達も機攻殻剣（ソード・デバイス）を持っているようだが……ルクス君は二本もあるな？」
シャリスが話しを切り替えて、ルクスたちの機攻殻剣（ソード・デバイス）を見やる。
試合が始まる前に、ルクス達も自分の機攻殻剣（ソード・デバイス）も返却してもらえたのだ。
指摘した通り、ルクスの腰にはそれぞれ白と黒、色の異なる鞘に入った二本の機攻殻剣（ソード・デバイス）が並んでいる。
「白い方は私と同じ《ワイバーン》で間違いないとして、もう片方は……」
「あ、いや、これはその……今壊れてまして、当分は使えないんです」
「そう、なのか？もし君達が勝って不問になれば、学園の工房で見てもらうといい」
「え、ええ、検討しますね。あはは……」
まじまじと黒い鞘の機攻殻剣（ソード・デバイス）を眺めるシャリスに、ルクスが慌てて説明する。

あからさまな様子ではあるが、シャリスは気にしない事にした。
「そしてそれがキミの機攻殻剣（ソード・デバイス）……で、いいのか、な？」
「これ？うん、ルクスがそう言ってた」
次にティルファーが三日月の機攻殻剣（ソード・デバイス）を見る。
オルガ同様、目を覚ました三日月の傍にあった物で、これもルクスの調べで機攻殻剣（ソード・デバイス）だと判明した物だ。
しかし、その機攻殻剣（ソード・デバイス）の姿にティルファーは唖然とする。
（全然それっぽく見えないんですけど……）
それは剣と言うには、あまりにも大きすぎた。
大きく、分厚く、重く、そして、大雑把すぎた。
それは正に、鉄塊だった。
「えーと、一体どんな装甲機竜（ドラグライド）が呼び出せるの？」
「分かんない」
「は？」
「色々試しても出せなかった。だから分かんない」
「……」
大きすぎて客席の下に置くしかないこれは本当に機攻殻剣（ソード・デバイス）なのか？

ティルファーは三日月の言葉を疑うが、機攻殻剣(ソード・デバイス)特有の柄にあるボタンに気付き、信じるしかなかった。

「――――――くッ！」

リーズシャルテは真下から飛んでくる機竜爪刃(ダガー)を避け、《空挺要塞(レギオン)》同様、手元に転送した機竜息銃(ブレスガン)を《獅電》に向けて連射する。

しかし、数発命中しても《獅電》に目立った銃創が確認できない。

それでもリーズシャルテは動揺しない。

今の機竜息銃(ブレスガン)はあくまで牽制、《獅電》の動きを止めて《空挺要塞(レギオン)》を当てる事に集中している。

ナノラミネートアーマーも万能ではない。

確かに、実弾もビームも弾く事は出来るが限界もある。

同じ箇所を何度も当てられ続ければ、そこの塗料は剥がれ、防御力が低下してしまう。

他にも、耐えられる範囲以上の質量をぶつけられれば、ナノラミネートアーマーも機能しない。

そのため、オルガ達の世界でのＭＳ戦は、近接武器による接近戦が決定打となる。
今のオルガの脅威は自在に宙を舞う質量兵器《空挺要塞（レギオン）》、故に直撃しないよう注意を払っているが、それでも何回か当たってしまう事があり、
《獅電》の装甲の所々が凹み、小さなヒビも入っている。
（チッ、このままでは……）
リーズシャルテはちらりと、大時計の方へと視線をやり、針を確認する。
試合の残り時間は後五分ほど。
《獅電》の特性は理解した。
《空挺要塞（レギオン）》を当て続ければ仕留められる。
だが、《獅電》の損傷具合からして、今のペースで機能停止に追い込むには時間が少し足りない事も把握してしまう。
撃墜できずに制限時間が来てしまえば、引き分けという事になる。
リーズシャルテとしては、それで今回の件が不問になってしまうと都合が悪い。
「……ん？」
こうなれば『アレ』と『アレ』を使うしかないか？
と、考えていると、ライフルを投げ捨て背嚢と脚のバーニアを吹かし、『空挺要塞（レギオン）』の猛攻を凌いでいた《獅電》が、ある物を握っている事を視認する。

それは竜尾網線（ワイヤーテール）。
中距離用の武装で、名の通り竜の尾を連想させる、先端の尖ったワイヤー兵器だ。
「弾が切れたからそれに換えたか？だがこの距離では私に当たらんぞ！」
リーズシャルテは挑発するが、オルガはそれを無視し、構わずに竜尾網線（ワイヤーテール）を振る。
彼女の言う通り、両者の距離が離れすぎているため、当てる事は叶わない。
しかし、それが《ティアマト》を狙ったものだった場合、の話だが。
（こいつ、一体どこを見て？）
竜尾網線（ワイヤーテール）の先端は、《ティアマト》と全く違う方向に飛ばされる。
土壇場の一撃が外れたのかと、リーズシャルテが視線を竜尾網線（ワイヤーテール）の方に向けると、
「――あれは！」
伸びたワイヤーは地面に転がっていた物を巻き取り、それ諸共《獅電》の手元に戻っていく。
たった今、《獅電》が握った物はリーズシャルテも見覚えがある。
叩き落された、自分の機竜息砲（キャノン）だ。
機竜息砲は《獅電》の幻想機核（フォースコア）から送られるエネルギーを充填し、発射する準備を始める。
「狙いはそれか……させるかっ！」

機竜息砲を破壊せず、的確に絡め取る技量に舌を巻くリーズシャルテだが、このまま思い通りにさせる訳にはいかない。
全神経を《空挺要塞》の操作に集中させ、ここで仕留める！
これにより一六機の《空挺要塞》が今以上に俊敏に、不規則に飛び回る。
このため《獅電》も躱しきれず、数機と激突してしまう。
装甲の凹みもヒビも増え、限界が近づいてきたが、それでもオルガは機竜息砲の充填を決して止めない。
そして数秒後、機竜息砲の溜めが完了し、砲口を《ティアマト》に向ける。
「ッ、しま――」
リーズシャルテは《空挺要塞》の操作に集中して避けられない。
その《空挺要塞》も、発射の妨害をするには間に合わない。
機竜息砲の引き金が下ろされ、光芒が《ティアマト》目掛けて放たれた。
――かに、見えた。
「――なに？」
リーズシャルテは身構えるが、軌道を予測して、放たれた砲撃は《ティアマト》の上へと飛んで行くだろう。
動かずとも決して当たる事はない。

今度こそ、土壇場の一撃が外れたのだ。
この事にリーズシャルテは安堵するが――視界の上部から降ってくる物に気づく。
先程、《獅電》が真下から投げた機竜爪刃（ダガー）だ。
勢いを失い、重力に身を任せて落ちていくそれが光に照らされる。
光の発生源はもちろん機竜息砲（キャノン）の砲弾、ダガーとキャノンの距離がどんどん縮んでいき、やがて触れ合い――。
――――。
爆発する。
リーズシャルテは衝撃に巻き込まれなかったが、光と煙に包まれ、しばし視界を失ってしまう。
目が慣れ煙が晴れた時、《獅電》の姿を確かめるが、
「――――!?」
眼前に、その《獅電》が棍棒（バルチザン）を振り上げて、目の前に迫って来ていた。
リーズシャルテの視界が奪われた時、《空挺要塞（レギオン）》の操作もままならなくなったので、それらを避けて《ティアマト》に肉薄する事が可能になったのだ。
咄嗟に、リーズシャルテは《ティアマト》を後退させ、棍棒（バルチザン）の命中範囲から逃れる。
が、相手の距離に合わせるように棍棒（バルチザン）の柄が伸び、範囲も広がってしまう。

棍棒（バルチザン）は状況に合わせて柄の長さを調節する事ができるのだ。

一発。

二発。

三発。

四発。

そして大きく振りかぶり、最後の五発目を振り下ろす。

「あああぁぁぁぁあああッ!!」

リーズシャルテの悲鳴と共に、《ティアマト》が吹き飛ばされ、地上にぶつかり土煙を上げる。

神装機竜の機竜使いが無名の機竜使いに叩き落された。

この光景に、観戦席から驚愕と困惑の声が広がる。

オルガが装甲機竜を乗りこなせるようになって、まだ一週間なのは事実だ。

しかし、ここまでの実力を手にできたのには理由がある。

オルガを指導したルクスの異名は『無敗の最弱』。

トーナメントにて、誰が相手であろうと常に引き分けという結果を残し、一度も敗北を見せない事が由来で付けられたものだ。

勝利を求めない腰抜け、などと貶す者もいるが、オルガと三日月は気づいている。

ルクスは『どんな相手』にも負けないだけなのだ。
それがランキング上位の機竜使いであったとしても、必ず『引き分け』に持ち込める。
つまり、ルクスはその気になりさえすれば優勝できる実力を持つ機竜使いだ。
何故そうしないのかまではわからないが、装甲機竜について教える内容も確かなものに間違いない。
しかしきりもみ回転、引き撃ち、高速飛行からの急な方向転換と、無自覚に自分の物差しを基準にしてしまい、かなりスパルタな内容になってしまっていたが。
単純な話、ルクスがオルガに求めるレベルがあまりに高かったのだ。
「こいつで終わりだ！」
地に伏した《ティアマト》目がけ、バーニアを吹かせた《獅電》が飛ぶ。
確かな手ごたえに、勝利を確信したオルガは棍棒を握り直す。
強力な神装機竜といえども今の攻撃は流石に応える。
このまま優勢を維持すれば――と思っていた時、
「な――――」
オルガは不意に、下から引っ張られるような感覚を受け、地上に激突してしまう。
《獅電》の損傷が激しいあまり、バーニアが停止した？
否、そのバーニアは今も稼働しており、誤作動の様子もない。

手足を動かそうにも、反応こそすれどとても重く、まともに動かせない。
一体どういうことなのかと、動揺するオルガの前方で機攻殻剣（ソード・デバイス）を振るうリーズシャルテが口を開いた。
「神の名の下にひれ伏せ――《天声（スプレッシャー）》！」
高らかな声と同時に、リーズシャルテが機攻殻剣（ソード・デバイス）をオルガに指す。
瞬間、《獅電》の全身が更に、地面にめり込み沈む。
《空挺要塞（レギオン）》によって生じた装甲の亀裂が、徐々に広がっていく。
「これ、は――」
「我が《ティアマト》の神装、《天声（スプレッシャー）》。これを使うのはお前が初めてだよ」
神装とは、神装機竜に秘められた特殊能力の事だ。
その能力は神装機竜の種類だけ存在すると言われ、個々の正体はほとんど知られていない。
アイリから聞いた情報にもこれはなかった。
《獅電》と共に全身にかかった強烈な負荷から察するに、《ティアマト》の神装は重力を制御するようだ。
だが、気づいた所で状況はすでに詰んでいた。
オルガの周囲を竜巻のように高速で《空挺要塞（レギオン）》が旋回し、逃げ場を奪う。

「これで終わりじゃないぞ?·特別にこれも見せてやる」
立ち上がる《ティアマト》の周囲に光が走り、何かが転送されてくる。
普段は負担が大きいため、使用を避けている付属武装。
七つの砲口を持つ巨大な砲身。
女神ティアマトは魔物の軍勢を生み従え、自身も七つ首の竜と化す。
《七つの竜頭(セブンスヘッズ)》と呼ばれる付属武装が《ティアマト》の右肩と右腕部に連結――接続された。
「ちょ、ちょっと待ちなさいリーズシャルテ姫!·相手を殺す気ですか!?そこまでしたら模擬戦の域を――」
周囲の観客席で大きなざわめきが広がると同時に、監視役の教官が止めようとするが、
「――――終わりだ」
当のリーズシャルテにはそれが聞こえず、《七つの竜頭(セブンスヘッズ)》の照準をオルガに合わせる。
ナノラミネートアーマーの効果が薄れた今の《獅電》には大変な脅威だ。
砲口の中が光り、放つ準備を始めた――――その時。
「――――なッ!?」

ガクン！

という音と共に、《ティアマト》を纏ったリーズシャルテがぐらりと傾いた。

ほぼ同時にオルガと《獅電》にかかっていた重力も解除される。

リーズシャルテは何が起こったのか把握しきれない様子で、自身の身に纏った機竜を見つめている。

（今だ――――！）

神装機竜は汎用機竜と比較して、その操作難度と使い手の消耗が激しいだけでなく、もっと根本的な危険がある。

それは暴走だ。

装甲機竜（ドラグライド）の操作は大別して二種類ある。

身体に纏った装甲を、自分の手足と力加減で操作する肉体操作と、機攻殻剣（ソード・デバイス）を経由した思念で行う精神操作。

その二種を巧みに使い分け、通常は操作を行っているのだが、極度の疲労や負担により使い手のリズムが狂うと、機竜が想定外の行動をとってしまう――つまりは、暴走が始まる。

決着を急がなければお互いに危険だ。

これを好機と見た瞬間、オルガは《獅電》の推進出力を最大にして、飛翔した。

「くっ……!?こんな、こんな事で……」
リーズシャルテの顔に明らかな動揺と、憔悴（しょうすい）の色が浮かぶ。
だが、瞬時に切り替える。
リーズシャルテは機攻殻剣（ソード・デバイス）を振るい、新たな思念を飛ばした。
オルガの周囲を舞っていた計十六機の《空挺要塞（レギオン）》が一斉に出力を失い、落下する。
制御の切断。
他の武装へ分散していた意識と力を集中し、ただ一点の破壊力を選択した。
主砲、《七つの竜頭（セブンスヘッズ）》に全エネルギーを収束させる。
「わたしが負けるかぁぁああ!!」
裂帛（れっぱく）の叫びと同時に、《ティアマト》が制御下に戻った。
棍棒（バルチザン）を構えて迫るオルガと、眼前に狙いを定めるリーズシャルテ。
二人の戦いが最高潮に達した、その瞬間――――、
決して起きるはずのない、異変が起きた。
ギィイイエエエエエエエエエエエエエアアアアッ!!
「……!?この声は――――!」
雲を縦に貫き、獣の絶叫が降りてくる。
演習場の高い空から、人ならざる闖入者が突っ込んで来た。

第４話　幻神獣（アビス）

機竜使いが敵として警戒に値するのは、同じ機竜使い（ドラグナイト）だけではない。
否、それより余程気をつけなくてはならない、人の天敵がこの世界にいる。
幻神獣（アビス）。
十余年前、機竜が発掘された遺跡（ルイン）から時折現れるようになった、正体不明の幻獣。
その種類は無数にあり、見つけた人間や動物を見境なく襲うと言われている。
獣と違うのは、その尋常ならざる強さと不可解な生態、そして特殊能力だ。
故に、殆どの大国では遺跡の近くに砦や関所、城塞都市を幾重にも置き、機竜使いを配備して不測の自体に備えている。
この城塞都市（クロスフィード）も遺跡（ルイン）と王都の間ある、防衛拠点も兼ねた都市なのだ。
だが――――、
「きゃあああぁっ!?」
「な、なんでこんな所に　が――――!」
「どうして警報が鳴ってないのよ!?」
「落ち着け！下級階層（ロウクラス）の生徒は機攻殻剣（ソードデバイス）を抜くな！慌てずまとまって、校舎へ避難しろ

！」

観客席の女生徒達から、次々と悲鳴が上がる。

機竜使いの士官候補生とはいえ、実戦を経験した者は少ない。

幻神獣は出現率こそ低いのだが、基本的に機竜使いの数倍の戦闘力を備えている。

しかも、本来は城塞都市から、数十Ｋｌも離れた遺跡から飛んでくるのだから、近くの砦や関所から連絡が来ているのが普通なのだ。

更に観客席という密集地帯で機竜を展開しようとすれば、召喚までに手間取るのは目に見えている。

観客席の障壁を張るために配置されていた生徒の機竜使い八名ですら、この未曾有の事態にまるで身動きが取れずにいた。

「一体、何が……？」

女教官のライグリィは生徒をまとめつつ上空を睨み、腰の機攻殻剣に手をかける。

しかし、幻神獣の習性は攻撃を仕掛けた者に反撃し、逃げようとした獲物を追う傾向が強い。

地上から迂闊に手を出せば、上空にいる幻神獣が反応し、眼下の観客席に攻撃を仕掛けるかもしれない。

故にライグリィは判断に迷う。

だが、そのとき――――、
ギィイアアアイイエェェエアアアアア！
翼人のフォルムを持つ機械型の幻神獣（アビス）、ガーゴイルが吠える。
同時に、その両翼を羽ばたかせて急降下を始めた。
軌道は一直線、高速で降ってくるガーゴイルの視線の先にあるものは――――、
「ッ……!!」
リーズシャルテだ。
このままガーゴイルの突進を許せばただではすまない。
しかし、《ティアマト》は暴走状態を無理矢理抑えたためか、右腕以外まともに動かせない。
必死に操縦桿を動かし続けるリーズシャルテだが、それも徒労に終わるだけであった。
そうしている間にもガーゴイルが迫り、牙を剥く。
無慈悲な怪物が、死が近づいてくる。
リーズシャルテの心に焦りが生まれ、顔が青冷める。
「させるかっ！」
しかし、寸前でオルガが割って入り、身構える。

そしてガーゴイルの体当たりが、オルガに直撃した。
「きゃあっ」
しかし、オルガはパルチザンを前へ突き出した事で、ある程度は衝撃を抑えられた。
が、それでも幻神獣（アビス）の攻撃は強力で、《獅電》は背後の《ティアマト》ごと吹き飛ばされてしまい、リーズシャルテから悲鳴が漏れる。
背後の壁にぶつかる一歩手前でどうにか態勢を整え、激突を回避できたが、手に持っていたパルチザンの柄が完全に折れてしまった。
先程、リーズシャルテから奪ったキャノンは《天声（スプレッシャー）》で砲身が潰れてしまい、もう撃てない。
《獅電》に残された武装は、ルクスから借り受けた一本のワイヤーテールと数本のダガーのみ、幻神獣（アビス）を相手にするにはあまりに心許ない。
そのうえ満身創痍の《獅電》でどうにかできるのか？
と、考えるオルガだが、そんな余裕もすぐに消えてしまう。
「な――――！」
ガーゴイルが、眼前に迫っていたのだ。
獲物を仕留め損ねたが故の追い打ちか、右手に生えた鋭い鉤爪を振りかざしている。
真っ二つのパルチザンでは防げない、かと言ってワイヤーテールとダガーでは盾にな

らない。
肩の小盾で防ごうにも、鉤爪の方が先に胴体に当たる。
ひび割れた装甲など、簡単に砕けて中の肉体が切り裂かれるだろう。
（またこんな、呆気なく終わるのか？俺は――――）
かつて、突然現れて自分の命を奪った刺客達。
この殺意を向けるガーゴイルという化け物にそれらと姿を重ねながら、オルガは二度目の死を覚悟する。
が、しかし。
――――!!。
突如、ガーゴイルの後方から轟音が響く。
何事かと思ったガーゴイルは攻撃の手を止め、そちらを振り返る。
「オルガッ!!」
オルガの名を叫ぶと同時に、猛スピードで何かが迫って来た。
それが自身にぶつかる直前でガーゴイルは横に避け、態勢を整える。
オルガは一体何が起きたのかと、前方に現れたそれを確認すると……
「オルガ、大丈夫!?」
「ライドじゃねぇか！」

「ルクスだよ！絶対わざとでしょ!?」
全身を覆う青い装甲、汎用機竜《ワイバーン》を装着したルクスが立っていた。
「って、こんなこと言ってる場合じゃなかった。オルガはリーズシャルテ様を連れて早く逃げて！コイツは僕がなんとかする！」
ルクスはオルガにそう告げてブレードを構え直し、ガーゴイルを睨みつける。
先ほどまでルクスがいたであろう観客席の方には、格子が破壊されて大きな穴が開いている。
ガーゴイルが突撃したタイミングで《ワイバーン》を展開し、強引に介入したのだ。
「あ、ああ、わかった。けど気ィつけろよ」
オルガはルクスの指示に同意し、リーズシャルテの方に振り向く。
対するルクスはガーゴイルの注意を惹くためにブレードを振るう。
ガーゴイルは寸前で躱すが、これにより標的をルクスに変更、咆哮を上げて襲いかかる。
並の機竜使い（ドラグナイト）ならたじろぐ気迫だが、ルクスは動じる事なく冷静にブレードを操り、ガーゴイルの猛攻を受け流す。
「おい、リーズシャルテ！無事か!?」
「あ、ああ、なんとかな……」

リーズシャルテに近づいたオルガは彼女の安否を確認する。
幸い、装甲機竜（ドラグライド）の障壁のお陰で、目立つ外傷は存在しないようだ。
「アレの事はルクスに任せる、俺達は下がるべきだ。早く《ティアマト》を解除してくれ」
オルガの見た所、《ティアマト》はまともに動けない。
《獅電》で運ぼうにも機体の状態は良好とは言い難く、かなりの時間を費やしてしまうだろう。
そのため《ティアマト》を解くよう、促すが……
「いや……それはできない」
「アンタ正気か!?んな状態でまともに戦えるわけねぇだろ！」
「違う！《ティアマト》が解除できないんだよ!!」
「――――――」
汗と砂で汚れ、焦りを隠せない顔で、リーズシャルテは怒鳴り返す。
その答えにオルガは言葉を失う。
であれば、彼女はここで足を止めざるを得ない事になる。
今はルクスが食い止めているが、自分達を守りながら戦うのは苦しいだろう。
何かの拍子でガーゴイルがこちらに向かって来る可能性も否定できない。
他に手は無いのか?とオルガは辺りを見渡す。

前方にはルクスとガーゴイル。
少し離れた横には散らばった《空挺要塞》。
そしてルクスがいる場所より向こうの観客席には――――。
「……リーズシャルテ、右腕が動くってんなら、その大砲も撃てるのか？」
「え？まあ、な。精々一度が限界だろうが」
オルガは脳裏にある一つの案が浮かび、改めてリーズシャルテに問う。
あの時、右腕だけが動いていたのを見逃さなかったのだ。
「じゃあ俺とルクスで奴の気を引く。合図をしたらそいつでトドメを刺せ」
「お、お前、わたしに命令する気か？大体、お前こそそんな状態で幻神獣（アビス）とまともに……」
「言ってる場合か！いいから聞け！」
リーズシャルテは反論を遮られるが、それほど不快感は感じていなかった。
目の前の男なら、きっと解決してくれる。
オルガの目から、どこかそんな安心感を感じたからだ。
「……いいだろう、お前の策に乗ってやる。だが気を引くと言ってもどうする気だ？それが難しいと、お前自身が一番理解しているはずだ」
「もちろん、分の悪い博打だろうよ。けど無計画って訳じゃねぇぜ、俺達ならできる。見ててくれ」

オルガはそこで話を終え、半壊の《獅電》でルクスの下に向かう。
その背に浮かぶ、傷だらけの赤い花のエンブレムが、リーズシャルテの目には輝いて見えた。

「全員よく聞け！帯剣している生徒は全員抜剣だ！頭上に障壁を展開しろ、剣を持たない生徒の盾になれ！敵の始末はこちらでやる。
今は幻神獣に手を出すな！」
一方その頃、観客席とその周囲は混乱と恐慌に包まれていたが、教官の叱咤により複数の生徒が次々と装甲機竜（ドラグライド）を身に纏う。
「やれやれ、候補生の皆さんはまだ突発的なトラブルには弱いんですよね」
少し離れた位置で生徒達を眺めながら、アイリはため息をつく。
身体が弱く、文官志望であるアイリは機攻殻剣を持っておらず、三和音の三人が機竜を展開し、もし巻き添えを食らっても問題ないように彼女の周りで障壁を張っている。
「ＹＥＳ．ですが無理もないかと、学園に幻神獣が現れたなど前代未聞で、ましてや警報も無い完全な不意打ちです」

「確かにね」

ノクトの言葉にシャリスは周囲を見渡し、同意する。

「彼女達は幻神獣(アビス)の力に動揺してしまっている、待機と防御を命じて正解だ。私の父も言っていたよ、一度恐怖に支配された兵はその戦闘ではまともに動けないと。ルクス君はそうでもなさそうだが、やはり幻神獣(アビス)相手に汎用機竜一機だけでは無理だ。リーズシャルテとオルガ君もあの状態で、早く他の教官達が来てくれなければ――――」

「敵はどうやら、一体だけのようですね」

緊張を帯びたシャリスの声に反し、アイリは余裕の笑みを崩さずに呟く。

「なら、負けませんよ。兄さんなら――――」

「ちょ、ちょっと何してんの!?危ないって!」

しかし、突然のティルファーの叫びに遮られてしまいノクトとシャリスに伝わる事はなかった。

決め台詞を邪魔されて、アイリは不服そうにティルファーを睨むが、彼女が前方の斜め上を見上げているので視線を合わせてみると……

「み、三日月さん!?」

先ほどまで近くにいたはずの三日月が、自身の巨大な機攻殻剣(ソードデバイス)を背負い、格子をよじ登っていた。

アイリだけでなくノクトとシャリスもそれを目撃し、驚きの表情を見せる。
「早く戻れ！目の前の幻神獣（アビス）が見えないのか?!」
シャリスの呼びかけが聞こえてないのか、あるいは無視しているのか、三日月は構わずに上り続ける。
今すぐ飛んで連れ戻せば事は済むのだが、自分達より上の立場の教官から待機を命じられた以上、動くことができない。
最も、ガーゴイルが彼に向かったら、その命令に逆らってでも救助に向かうつもりだが、それで間に合うかは分からない。
「どうしてこう、兄さんの周りには困った人が多いのですか……！」

『ルクス！リーズシャルテが動けねぇから撤退は無理だ、俺に策があるからもう少し時間を稼いでくれ!!』
四、五分ほど前に、遠距離の機竜使い（ドラグナイト）相手と会話を可能にする装甲機竜（ドラグライド）特有の機能、竜声からオルガの声が響いた。
一方的に伝えられたルクスは反論しようとしたが、ガーゴイルの相手で精一杯だ。

しかしそれでもガーゴイルの攻撃を防ぎ躱し、今この時までその場から動かさないよう粘り続けていた。

「ああもうっ、どいつもこいつも！」

先程から自分の周囲で何かを物色している様子のオルガに対して、ガーゴイルにも対してルクスは悪態を吐き、ブレードを振るう。

しかしそれはガーゴイルには届かず、躱されてしまう。

お返しと言わんばかりに鉤爪による攻撃が飛んでくるが、寸前に直撃する前にルクスは必要最低限の動きで避ける。

隙ができたガーゴイルの脇腹に、次は装甲機竜のエネルギーを収束して打ち出す連射型の小銃、ブレスガンを撃ち込む。

装甲機竜（ドラグナイト）の一般的な装備だが、一発一発の威力はそう高くなく、ガーゴイルには数発当てた程度では効果が薄い。

キィエァアアア！

だが、ガーゴイルにとってそれは不愉快なものらしく、怒気を孕んだ叫びと共に鉤爪が高速で飛んでくる。

今度は両腕を使ってくるが、右腕と左腕で距離が違う。

先に右の鉤爪で切り裂き、外した際の保険も兼ねた左の鉤爪で追い打ちをかけるつも

りだ。
左右から繰り出されるこの二撃は、並の機竜使いでは避ける事も防ぐ事も叶わないだろう。
「――――」
しかし、ルクスは動揺せずに視線を鋭くし、右腕が命中する寸前でブレードを構え攻撃を逸らした。
鉤爪とブレードがぶつかり合い、激しい火花を起こす程の衝撃を利用し、ルクスは身を屈めつつ一回転。
二撃目がすかさずに迫るが、それは頭頂部の真上の空を切るだけで不発に終わる。
ルクスはこれにより生まれた隙を逃さずに、構え直したブレードを振り上げた。
すると、それはガーゴイルの金属製の左腕を切り裂き、バチバチと電流を吹き出させた。
ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛!?
完全に切断とまではいかなかったものの、装甲の隙間に当てられ中の銅線も裂かれたガーゴイルは叫び、無事な右腕で傷を抑えつつルクスから距離を取る。
あの人間は必ず葬らなければならないと、機械の表情を険に変え、殺意を隠しきれない瞳でルクスを睨む。

ルクスの戦闘経験は王都のトーナメントだけではない。
遺跡の警備という仕事をこなし、幻神獣（アビス）と交戦したことも幾度となくある。
更に、この5分の時間でガーゴイルの動きも完璧に把握した。
ルクスはブレードを構え、ガーゴイルを睨み返す。
頭の中で勝利の方程式が組み立てられ、相手がどのような行動を取ろうとも対処できると確信する。
しかし、戦っているのは自分だけじゃない。
ガーゴイルは巨大な翼を広げて身を屈め、突進の姿勢を取る。
そして、曲げた足を蹴ろうとした矢先――――。
ガッ……!?
突然、自身のこめかみに鈍器で殴られたような衝撃が走る。
ガーゴイルはよろめき倒れそうになるが、咄嗟に姿勢を整えどうにか転倒を防げた。
何事かと、衝撃が来た方向にガーゴイルは顔を向けると、金属製の物体が間近に迫っており、再び直撃してしまう。
「待たせたな、ルクス！」
物体の正体はティアマトの《空挺要塞（レギオン）》だ。
リーズシャルテが制御を切断し、単なる鉄塊と化したこれらをオルガは拾い集め、

ガーゴイルに向かって投げつけたのだ。
極めて原始的な手段だが、対象に飛ばしてぶつける用途の空挺要塞なら使い方もあながち間違ってはいないのかもしれない。
しかし遠巻きに見ていた所有者のリーズシャルテからは「そんな風に扱うなー！」という野次が飛んでくるが、オルガは構わずに次々と《空挺要塞（レギオン）》を思い切り投げる。
ガーゴイルは無数の飛んでくる《空挺要塞（レギオン）》を避け、防ぎ、鉤爪で弾いて対処する。
「おっ……らぁッ!!」
そして最後の一つを力強く投げ、バックパックの火を吹かして前方に飛ぶ。
ガーゴイルも《空挺要塞（レギオン）》を弾き飛ばし、前方から向かってくる獅電を迎え撃つため腕を振るう。
だが、ガーゴイルはオルガに集中するあまり失念していた。
オルガの攻撃で完全に注意が逸れた隙をルクスは見逃さずにワイバーンを加速、すれ違い様にブレードでガーゴイルの片翼の根本を切断した。
グギャアアアアアアアアアアッ!!
闘技場に悲鳴が上がり、弧を描いて宙を舞う翼が地に叩きつけられる。
背後からの奇襲に身体の一部を失った痛みでガーゴイルの振るった腕も空だけを切る始末。

そのままガーゴイルの後方へ抜けられたオルガは脚を強く蹴り、上空へと跳んだ。
バックパックの後押しもあり、上へ上へと飛んでいくオルガの視線の先には、闘技場と客席の間にそびえる格子の天辺があり、その上に――。
「ミカァ!!」
「オルガ!!」
騒動のどさくさに紛れて格子をよじ登り、その頂上で機攻殻剣（ソードデバイス）を掲げる三日月の姿があった。
オルガの叫びに答え、相棒の三日月が機攻殻剣（ソードデバイス）を投げつける。
ぐるんぐるんと回転しながら降ってくるそれをオルガは掴み取り、進路を１８０度回転させて加速する。
幻神獣には通常の武器兵器は通用しない。
故に人類は装甲機竜（ドラグライド）を纏い戦う以外に対抗手段が無い。
しかし三日月が持つ機攻殻剣（ドラグライド）は従来の物より一回りも二回りも大きく、硬く、重く、それこそ装甲機竜の兵装であるブレードに匹敵する。
オルガは機攻殻剣（ドラグライド）を大きく振りかぶり、眼前の標的であるガーゴイルに迫る。
断たれた翼の断面を抑えようにも手が届かず、痛みに悶え続けるガーゴイルは頭上から飛んでくる物に気がつき、臨戦態勢をとろうとするがもう遅い。

振り下ろされた機攻殻剣（ドラグライド）がガーゴイルの頭部を直撃、轟音と衝撃を響かせた。
ガーゴイルはそのままゆっくりと倒れ、ピクリとも動かなくなった。
オルガは『獅電』を着地させ、大きく一息つく。
眼前の相手に大きなダメージを与えたのは間違いない。
だがそれで、安心できる理由はオルガには無い。
呼吸を入れ直したオルガは機攻殻剣（ドラグライド）を構え、それを被せるように肩の小盾も構えて万全の態勢をとる。
すると――。
――――!!
とても正常な生物のものとは思えない、けたたましい絶叫が闘技場に響いた直後に『獅電』に重い衝撃が走り、大きく後ろに吹き飛んでしまう。
先の模擬戦でひびの入った小盾が砕け散るが、防御の構えをしたお陰でオルガ自身と機攻殻剣（ソードデバイス）は無事だ。
――！――!?
ガーゴイルが起き上がり、『獅電』に一撃を加えたのだ。
頭部を大変強く打たれれば大抵の生物は命に関わる。
しかし、その大抵の生物の一線を画す幻神獣（アビス）にとってはそうでもない。

顔の半分が潰れていようが構わずに動き、人間を攻撃する。

だが片方の目玉が潰れ、もう片方の目玉も飛び出したガーゴイルは相手を見据える事ができない。

今の攻撃も記憶に頼りきった当てずっぽうにすぎない。

喉も口も潰れ、呻き声しか出せなくなったガーゴイルは何もない周囲に腕を振り回すしかなくなった。

「今だ、撃て!!」

叫びと共にオルガは視線を向ける。

その先には砲口の奥が光り、いつでも火を吹くことができる《七つの竜頭(セブンスヘッズ)》と、それを構えるリーズシャルテの姿があった》

「言われずとも……な!!」

リーズシャルテの掛け声と同時に、《ティアマト》の最強武装である《七つの竜頭(セブンスヘッズ)》の砲口から7筋の極大な光柱が放たれる。

それらはガーゴイルの強固な金属の身体をいともたやすくぶち抜き、粉砕した。

――!?!?!?

視界を失ったガーゴイルは自分の身に何が起きたのか理解できぬまま、爆散した。

後には黒煙が上がり、パラパラと舞い散る黒い金属片が残ったのだ。

鉄の魔物の敗北と戻った平和に、待機していた女生徒から安堵の歓声が上がってくる。

「まったく、なんて男だよ。お前……いや、お前達というヤツは」

《七つの竜頭（セブンスヘッズ）》を握った《ティアマト》の腕がだらんと垂れ、完全に動けなくなったリーズシャルテは笑う。

そのリーズシャルテの様子に「へへっ」とオルガは笑い返し、ルクスもその二人を眺めて微笑む。

まだ格子の頂上に立つ三日月は無言ではあるが両手を大きく振っている。

「しかし――やはり大馬鹿者だな」

リーズシャルテは毒吐くも、その表情に毒気は無い無垢な笑顔で天を仰ぐ。

そして、興奮と歓喜の収まらない生徒達を見据えて息を大きく吸った。

「聞け！この場にいる皆の物よ！新王国の王女であるわたしから、重大な話がある!!」